

城のある町の物語 — みんなの彦根城 —

彦根城は、今、世界文化遺産への登録を目指している。

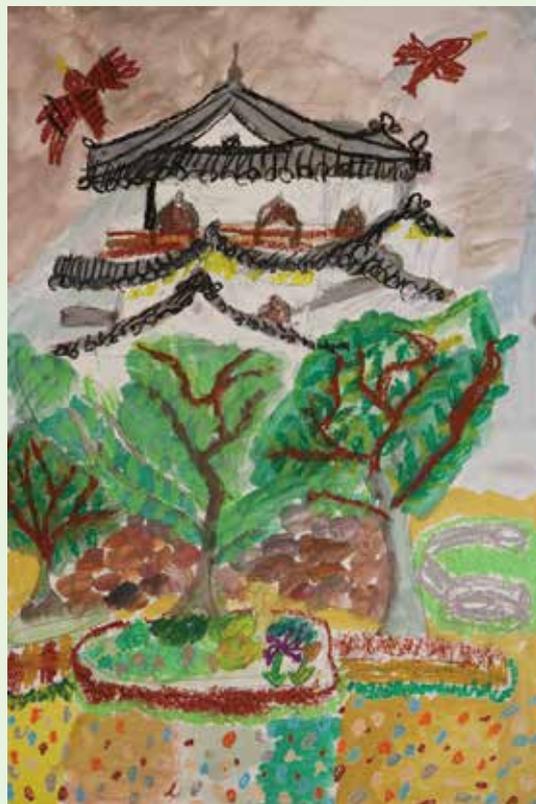
江戸時代、250年以上も続いた安定の時代。この時代を支えた城郭として、彦根城には世界文化遺産の価値がある。

彦根城は、彦根市民・滋賀県民に愛され、育まれてきた。そして、その思いを、世界文化遺産として引き継ぐために、写生や写真とともに彦根城と城下町の物語を紹介したい。

令和5年(2023年)3月
彦根城世界遺産登録推進協議会

表紙 目次

1. 車窓からの彦根城
2. 理想を追い求めた城郭
3. 石垣と水堀に囲まれた城郭
4. 天守はリサイクル
5. 今も昔も彦根城の中心
6. 高砂 や～ 謡えますか
7. 水面からの彦根城
8. 建ち並ぶ重臣の屋敷
9. まずは木俣へ
10. 美しさと厳しさの満ち足りた時
11. 永遠に続くシンボル
12. 市民が集い楽しむ城
13. 音で繋がる城と町
14. 城を感じる町
15. 古き町に賑わいを
16. 歴史の町に息吹を与える
17. 夢に向かって



裏表紙

- ・ 写生は、彦根青年会議所主催 令和4年度彦根城写生大会の入賞作品から
- ・ 写真は、滋賀県内在住。Sさん・Sさん・Hさん
- ・ いずれも、無断での転載は禁止します。

車窓からの 彦根城

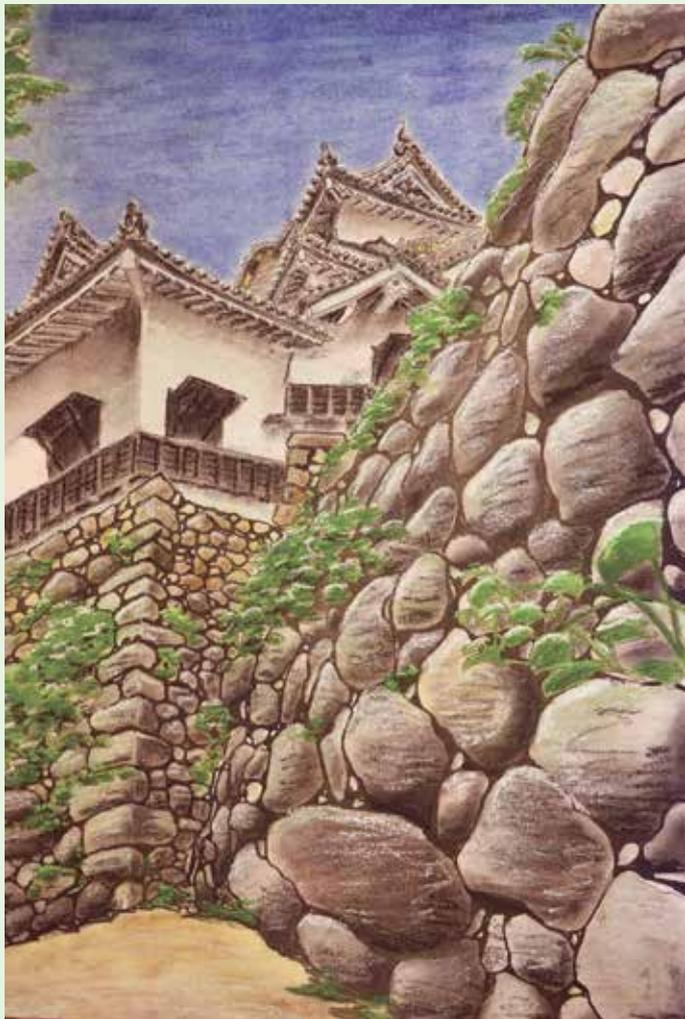
—思いが
見えるとき—



JRで彦根へ帰る。列車が芹川を渡る時、あるいは磯山を超えた時、車窓に遠く彦根城が見えてくる。「あー、彦根に帰って来た。」不思議な安心感に抱かれる。この安心感こそが彦根城への思いである。

江戸時代、武力を用いることなく安定を守った武士たちの思い。その城郭に抱かれて、商業や手工業、農業に励んだ領民たちの思い。

市民の願いで取り壊しの危機を乗り越え、市民のシンボルとして今も彦根城を守り続けている人々の思い。車窓からその歴史が見えてくる。



理想を追い求めた城郭

彦根城は、江戸時代が始まった直後（1604年）、井伊家の家老と将軍・徳川家康が相談し、湖東・湖北を治めるために、最も相応しい場所を選び築城を開始した。

大坂の陣（1615年）の後には、安定した時代にふさわしい配置に改め、表御殿や佐和口など、新しい城郭の正面も整備した。

17世紀の後半には、学問や文化を重視する時代に対応し庭園・玄宮園を整備し、18世紀後半には、藩校を城郭の中に開校させた。

彦根城は、城主の井伊家らしさを表すとともに、常に幕府の方針や考え方を取り入れ、最も正しい城郭の姿を追い求めた。

石垣と水堀 に囲まれた 城郭

—威厳と
—体感—



彦根城の中堀の内側には、彦根山にそびえる天守や櫓のほか、藩主が暮らす表御殿や庭園、藩校など、政治のための重要な施設が営まれた。さらに、彦根藩の政治のための話合いに参加する全ての重臣たちの全ての屋敷も営まれた。

これらの重要施設を堀と石垣で取り囲む。出入り口部分では巨大な多聞櫓が威容を示し、石垣の上には白堀もあった。近寄り難く荘厳な雰囲気。外から見る者には、威厳に満ちた公平な権威がその中に存在することを教え、内部に住む者には、その責任を果たすことを諭し続けた。



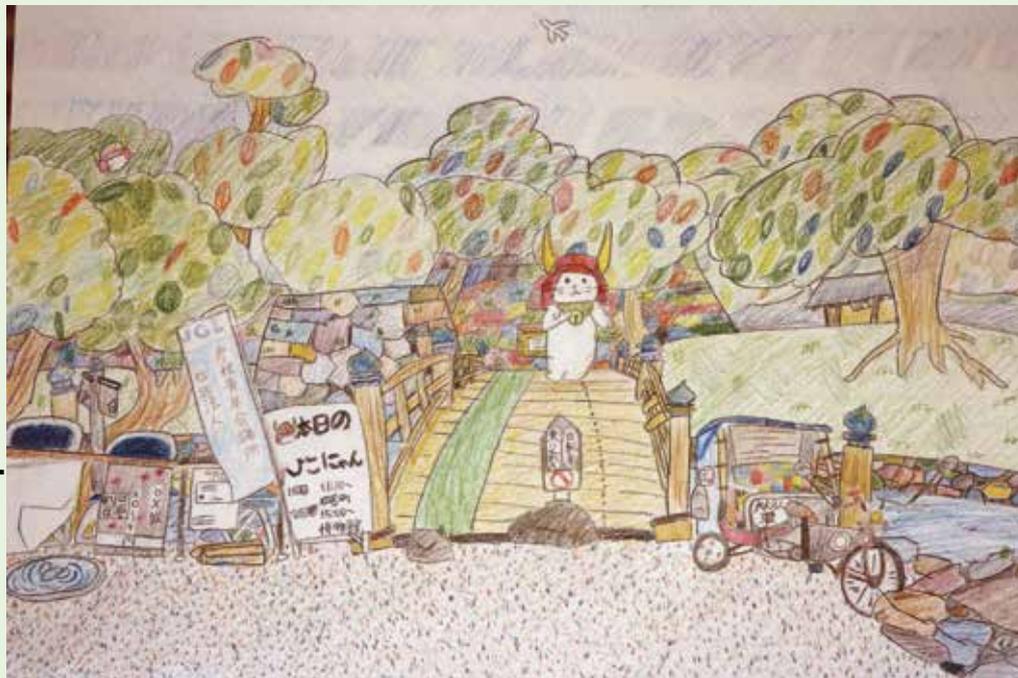
天守はリサイクル —平和な時代の建築資材獲得戦—

彦根城。最初に思い浮かぶのが、国宝の天守。3階建て、小型の天守ではあるが、飾り屋根を数多く持ち、金の金具、金の鯨などで飾る。華やかさが見どころの建物だ。

この天守はリサイクルによって建築された。一説によれば、家康の思召し召しで、関ヶ原合戦の勝利の記念として、大津城の天守を移築したらしい。実際、柱などを詳しく調べた結果、5階4重の天守の部材をリサイクルしたことが証明された。

戦乱が終わり、安定の時代。復興のため、建築ラッシュが始まった。材料確保。華やかな天守の建築にも、時代の知恵と思いが働いた。

今も昔も
彦根城の
中心
—表御殿と
彦根城博物館—



佐和口から彦根城に入り、内堀沿いを進む。表門橋を渡れば彦根城博物館。ひこにゃんと出会えるスポットでもある。彦根城博物館は、藩主の住居であり政治の中心施設でもあった表御殿を、同じ場所で外観を忠実に再現して建築された。博物館として必要な部分は鉄筋コンクリートであるが、奥には木造で、当時のまま復元した部分もある。

この彦根城博物館には、井伊家に伝わった古文書や道具類などが大切に保管されている。その外観とあわせて、彦根城の価値を伝える重要な役割を担う。

高砂や～ 謡えますか。

— 伝統と 革新の舞台 —



彦根城博物館の中には能舞台がある。かつて、表御殿にあった本物の能舞台で、彦根城博物館の建設に伴って、本来あった場所に戻された。

江戸時代、公式の行事では能楽が上演された。皆で集まり、同じ演目の能を観る。全員で能の世界観を共有し、一体感を醸成した。

今も彦根城の能舞台は現役である。年に数度の演能のほか、体験や各種のイベントも開かれる。趣向を凝らした革新の演目は、新たな仲間を結びつける。

水面からの 彦根城

—水城の面影と
藩主の気持ち—



彦根城の内堀には、観光船が運行されている。城郭の堀と言えば、敵の侵入を防ぐものと思われるが、江戸時代には年貢米などを運ぶ船が行き来し、時には、藩主を乗せた船が下屋敷へと向かっていった。

観光船はNPOが運営しており、藩主の屋形船をモデルとしている。船頭さんの楽しい案内を聞きながら、普段見ることのできない水上からの彦根城。しばしの間、彦根城が水城であった過去を藩主の気分で味わえる。



建ち並ぶ重臣の屋敷

—我こそは、一国一城の主—

彦根城の内堀と中堀の間には、30を超える重臣たちの屋敷が並んでいた。重臣たちはそれぞれの屋敷から表御殿に出勤し、彦根藩の在り方について話し合い方針を定めた。

重臣屋敷は長屋門や塀で厳重に囲まれ、その中には表御殿に似た建物が建っていた。

重臣たちは、本来、小さいながらも領地の主で、城館を構え、多くの権利を手にしていて、いかめしい長屋門が、その歴史と格式を伝えている。

江戸時代、城に住み、領地の権利を手放すことになった重臣たち。藩主は、彼らに敬語で話しかけた。

まずは木俣へ

—最初の理想を忘れぬために—

佐和口から彦根城に入る。すぐ右手が木俣家の屋敷。1万石を与えられた彦根藩の最上位の家臣で、家康から任命された家柄だ。

参勤交代で江戸から帰ってきた藩主は、表御殿に入る前に、まずは、木俣家の屋敷に立ち寄った。藩主は、木俣家の当主から1年間の報告を受けるとともに、江戸での出来事を伝えた。

大坂の陣の後、当時の藩主・直孝が、木俣守勝に戦勝を報告したことが起源とされる。「初心忘れるべからず。」井伊家が彦根城を任せ、この地の安定を築き上げた当時の使命と苦労を、忘れないための儀式である。

当時の木俣屋敷には、藩主専用の門が備わっていたと言う。





美しさと 厳しさの 満ち足りた時

—大名庭園の
本当の魅力—

広々とした池の水面に緑と天守が輝き、季節の移ろいを写しだす。玄宮園と呼ばれるこの庭園は、各地の名所・歌枕を見立てた景色や、理想とする風景を再現した。藩主たちは、庭園を歩き、景を愛で、和歌を詠み、漢詩を朗じる。田んぼでは豊かな実りに感謝を捧げ、馬と一体となり武士の気構えを感じ取る。

今も、茶室では抹茶の接待を受けることができる。心安らぐ穏やかな時間の中にも、凛とした背筋が伸びるような感覚を覚える。これが藩主・大名の庭である。



永遠に続くシンボル

— 見ること、見せること、
見られること —

大坂の陣の後、武士たちは大きな決断を下した。もう、「武力」には頼らない。武力で領地を切り開くことをやめ、今ある領地の安定に尽力する。平和の時代への決意である。

この決断の下、商人や工人たちは、町を豊かにする経済活動に励み、農民たちは戦に駆り出されることも、田畑を荒らされる心配もなく、農作業に取り組んだ。

武士と領民を結ぶ大きな決断。これを見守っていたのが、威厳のある姿を見せていた彦根城。人々は城郭を見上げ、安心を感じ、自分たちの責任・役割への決意を新たにした。



市民が集い 楽しむ城

—いつも、
そこに城がある—

彦根城の中堀と内堀に挟まれた範囲の大部分は、広く公開を目指す区域である。今でも、弓矢の大会などが開かれ、流鏝馬の試技が披露され、お城まつりにも多くの人が集まる。人々が楽しむその先には、天守の姿が見え隠れ。

この場所をどのように整えていくべきか、彦根城の大きな課題の一つである。人々が集い、楽しみ、交流を深める空間。かつて、政治を担った重臣たちの空間は、今や、市民の空間が相応しい。もちろん、地下には重臣屋敷の遺跡が眠る。

音で繋がる城と町

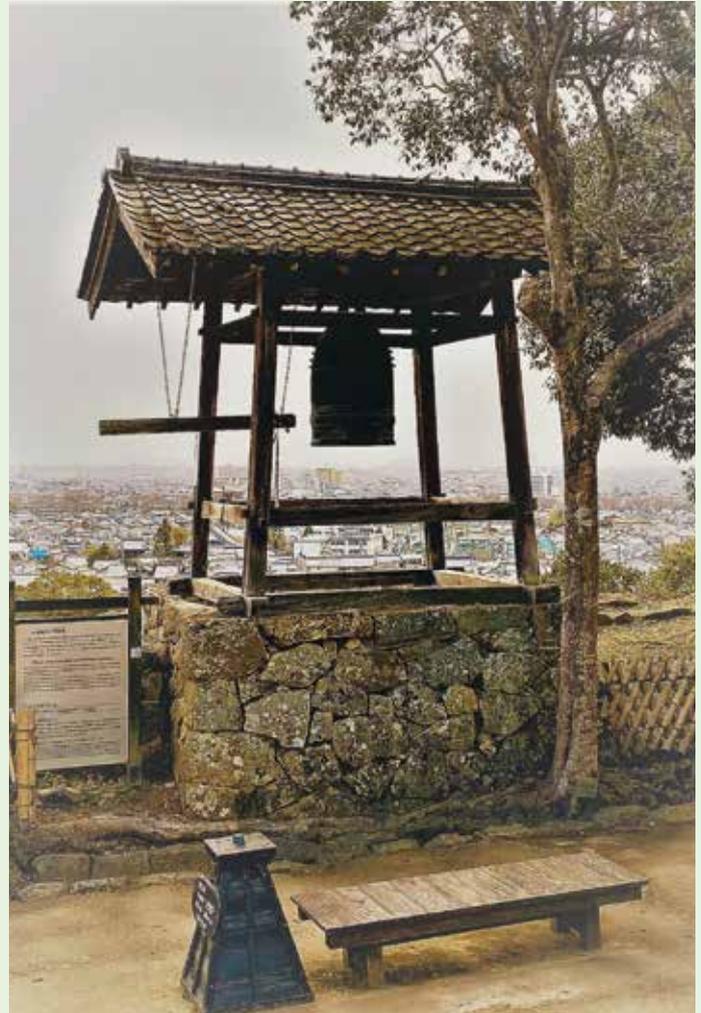
—音も風景—

彦根城の中には釣鐘がある。また、太鼓門櫓と呼ばれる建物もある。「敵が攻めてきた!」、「出陣しろ」、「全員集合」、戦いが続き、不安定な時代にあっては、鐘や太鼓は緊急を伝える重要な手段であった。

しかし、平和な時代。緊急を伝えることは少なくなった。それに代わり、城内で働く武士や、城下町で暮らす領民たちに、時を知らせる音に変化した。

夕刻、遠くに聞こえる鐘の音。立場を超えて、一日への感謝の気持ちを共有する。

今も、その音と気持ちは変わらない。





城を感じる町 —この景色をいつまでも—

城下町特有の細い路地を歩く。この方向に天守が見えるだろうか。こちらの路地はどうだろうか。実は、天守の見える路地は意外と少ない。これは、視覚効果を狙ったためだ。

しかし、たとえ天守が見えなくても、その「ワクワク感」が心地よい。そして、そこに城があるという存在感。

そこは城下町ならではの雰囲気には溢れている。江戸時代から続く水路、小さな祠、古い民家の屋根の飾り。

屈曲した細い道路、密集した建物、今の目から見れば、決して住みよい町ではないかもしれない。しかし、私たちはこの城と町が好きだ。そして、この町の暮らしを、未来に伝える。

これこそが、彦根城の世界遺産。



古き町に 賑わいを

—少しレトロな
商店街—

城下町は江戸時代で終わらない。明治時代以降も地域の中核として、発展の中心であり続けた。

江戸時代、城下町のメインロードであった伝馬町や本町は、明治時代以降も都市の中心・商業地として栄えた。銀座商店街。滋賀を代表する商店街の一つである。年に一度の大売り出し、恵比寿講は大変な人出でにぎわった。

しかし、全国の多くの商店街と同じく、今ではシャッターの降りた店舗も多い。もう一度、彦根城に相応しい賑わいを。若者たちの活動が始まっている。



歴史の町に
息吹を
与える
—新しい
城下の仲間—

彦根城から琵琶湖を望む。湖岸には船倉だろうか。倉庫のような建物が並んでいる。琵琶湖に面した城下町ならではの美しい風景。しかし、よく見れば倉庫と見えた建物が、最近のホームセンターであることに気が付く。

「だまされた？」のではない。城下町の新しい仲間が、彦根城に敬意を払い、自分もその仲間にならわたくし、共に彦根城の価値を守り伝えるための工夫である。

世界遺産にならわたくし、彦根城にならわたくし。みんなが知恵を出し合った少しの工夫が、歴史の町に息吹を与える。



夢に 向かって

—その先にある
ものは、
いつも彦根城—

彦根城のすぐ横では、新しい陸上競技場の建設が進んでいる。世界遺産に相応しくないとの意見もある。しかし、私たちは90年以上も、この場所で、彦根城を見上げながら、数々のスポーツを楽しんできた。彦根城を見ることが、スポーツを楽しむこと、それはいつも同じであり、これからもそれは変わらない。

その気持ちが伝わるように、新しい競技場の建設では、多くの人たちが話し合い、彦根城と競技場が一体となるように、設計に工夫し、色々な変更を加えた。100m競争。そのゴールの向こうには、天守と私たちの夢が待っている。



さあ！今年も傑作を仕上げるぞ！